

第1回 SPARC Japan セミナー2010

学会の仕事とその経営を知る

学会誌編集業務の実際

橋本 勝美

(日本疫学会)

講演要旨

日本疫学会誌編集担当者が、業務引継ぎから現在まで2年半の経験をお話します。編集室機能も任期制のため、後任者に編集機能の引継ぎをしても、スムーズにジャーナルを出版し続けられる編集体制と、国際標準のジャーナルに少しでも近づけることを目指して、様々な編集システムを導入しました。これらを具体的に紹介します。



橋本 勝美

2001年、がん研究振興財団刊行のピアレビュー誌 Japanese Journal of Clinical Oncology (JJCO) の Managing Editor となり、編集に携わる。制作は出版社に委託していたので、主に論文受け付けから掲載決定までの業務を担当。2002年にオンライン投稿・査読システム導入を経験。その後、学術誌の商業出版社編集部勤務を経て、2007年10月より日本疫学会誌 Journal of Epidemiology (JE) の Editorial Coordinator となり、論文受付から制作まですべてを管理している。

はじめに

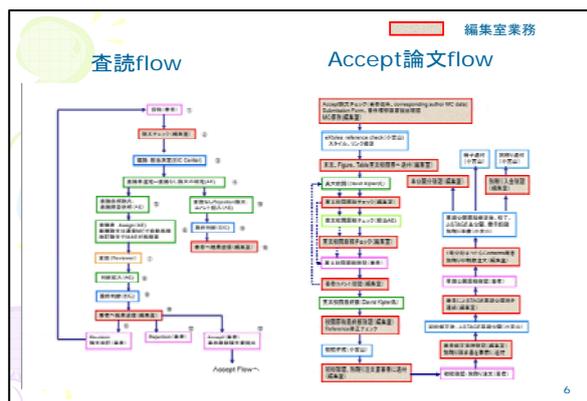
日本疫学会は1991年に発足した任意団体です。会員は1520名で、主に疫学研究者、臨床家、保健現場での実践活動に携わる方（保健所や行政関係の方）です。

日本疫学会誌「Journal of Epidemiology」(JE)は、英文のピアレビュージャーナルです。学会発足と同時に出版を開始し、現在、Vol.20まで出ています。年6回の定期刊行のほか、依頼があった場合に Supplement を発行します。今年は既に Supplement を2冊発行しています。JEは冊子とオンライン両方で公開していますが、冊子については縮小の方向で検討しています。オンラインジャーナルはJ-STAGEで

無料公開しており、2009年のインパクトファクターは1.643、採択率は25～30%程度です。

JE 編集室の業務と目標

JEの編集室は編集委員長の所属施設に置いており、現在は国立がん研究センターにあります。編集委員長の任期は3年で、現編集長は3年目ですので今年いっぱい任期が完了します。私は専任編集担当者(Editorial Coordinator)ですが、これは現在の編集委員会から始まったもので、現在3年目です。今後も専任編集担当者を雇い続けるかどうかは、予算の関係もありますのでまだ検討中です。編集委員は22名です。



(図1) 論文を受け付けてから出版までのフロー

編集担当者は私1人なので、One Person Publisher といえると思うのですが、投稿論文の受付・査読の管理に始まり、論文アクセプトから出版までの管理、編集委員会・理事会資料の作成、情報収集、編集委員会用ホームページ管理、予算、問い合わせ対応などが主な仕事です。

論文を受け付けてから出版までのフローをご紹介します(図1)。査読フローの方は、オンライン投稿システムを導入しているので、編集室の業務はそれほど複雑ではありません。投稿論文のチェックと著者への結果送信が主な仕事で、あとは査読状況の把握や編集委員アサインなどを行っています。一方、アクセプトから掲載までのフローは、印刷、英文校閲、著者との行き来のすべてに絡みますので、かなり複雑な仕事になります。

現在の編集室を始めるに当たって、二つの目標を立てました。一つは、編集委員長が任期制のため、引き継ぎをしても後任者が出版可能な編集体制を作ること、もう一つは、世界標準の国際ジャーナルに少しでも近づけることです。

目標①

—引き継ぎをしてもスムーズに出版するには

前編集委員長のときには、オンライン投稿システムがなく、論文の受付も査読のお願いもメール添付で行っており、論文はすべて編集長のパソコンの中がありました。論文管理のためのデータベースはなく、エク

セルの管理だったので、私たちに同じ方法での管理は絶対に無理だと思い、まずオンライン投稿・査読システムを導入しなければいけないと考えました。また、編集委員専用のホームページを開設し、マニュアルや内部手順書をいつでも参照可能にすることも考えました。

オンラインの投稿・査読システムの導入に当たっては、最初に海外のシステム三つと国内のシステム一つを比較しました。採択の基準の一番は使いやすさです。著者、編集委員、査読者、編集室、いずれにとっても使いやすいことが必須です。機能も、自動リマインダー送信の機能は必須だと考えていましたし、そのほかにリファレンスチェックやレポート機能なども比較しました。また、使いやすさと機能が優れていても費用が高くては導入できませんし、海外のシステムで日本に代理店がないと時差によりサポートが受けられないことも考えて、Manuscript Central (MC) を採用しました。これで投稿から掲載までの論文の一元管理が可能となりました。

投稿からアクセプトまでのピアレビュー利用は、MC を利用しているジャーナルであればどこでもしていると思いますが、JE では、アクセプトからブループロまでのプロダクション利用もしています。校閲原稿、リファレンスチェックシート、校正原稿なども全部MC にアップロードしており、引き継ぎをしても、MC を見れば論文についての記録はすべて残っているようにしています。編集委員会や理事会の資料作成のためにレポート利用もしていますし、MC の場合は日本に杏林舎という代理店がありますので、サポートも受けられます。

編集委員会の専用ホームページも、One Person Publisher ですので私が作っています。極めて簡単なものですが、編集委員から使い方について問い合わせのあったものはすべてスクリーンショットでマニュアルを作ってアップロードし、内部手順書などもこちらに入れてあります。

| Author | Title | Journal | Year | PubMed ID |
|---|-------------|---------|------|-----------|
| Marino, GJ, Lynch, JM, Hoshitani, H, et al. | ... for ... | Lancet | 1997 | 0182060 |
| Wu, Z, Yang, X, Zhou, D, Wu, S, Wang, J | ... | ... | ... | 11192798 |
| Cui, D, Raynolds, K, Wu, X, Chen, Z, et al. | ... | ... | ... | 15836888 |
| Lin, J, Tang, X, Li, Qinglin, RD, et al. | ... | ... | ... | 15171120 |
| ... | ... | ... | ... | 12218808 |
| ... | ... | ... | ... | 12218808 |
| ... | ... | ... | ... | 15238453 |

(図 2) リファレンスチェックシート

目標②—世界標準のジャーナルに近づける

前編集委員長は日本人でしたが、自ら英文校閲もしていました。しかし、今の編集委員長は自ら英文校閲をすることは、絶対に無理だと言うので、ネイティブによる英文校閲を導入し、スタイルの決定、オンラインジャーナルでの早期公開、情報の収集、編集委員の編集知識の標準化を行いました。JE のスタイル決定に当たっては、英文校閲者と印刷会社、編集室で話し合いをし、Uniform Requirement を基本に、American Medical Association (AMA)、Council of Science Editors (CSE) のスタイルマニュアルを参照しました。

JE でお願いしている印刷会社は eXtyles を導入しており、スタイルの半自動編集、XML (NLM-DTD) の作成が可能です。eXtyles 導入による編集室にとっての一番のメリットは、リファレンスチェック (PubMed リンクチェック) ができることです。リファレンスチェックシートを出すと、コメントのところに問題が指摘されているので、それを校閲原稿と一緒に著者に送って論文を修正してもらうことが可能です (図 2)。

次に、早期公開も必須だと考えました。当初はアクセプトから本公開まで半年ぐらいかかっていたのですが、2 カ月ほど早く公開することが可能になりました。それでも 4.5 カ月～5.5 カ月かかるので、さらに対策が必要ではないかと思えます。

それから、世界の標準のジャーナルに近づけるには、世界のジャーナルの動向を知らなくてはなりません。

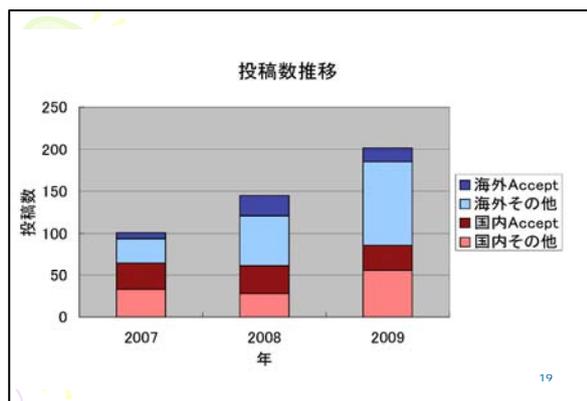
いろいろな情報を収集するために、International Committee of Medical Journal Editors (ICMJE) の Uniform Requirement をチェックしています。これはそれほど頻りに更新されるわけではないのですが、結構重要なものがあり、最近も conflict of interest について、いろいろなジャーナルで共通のフォームを使うということが公開されています。また、イギリスの Committee on Publication Ethics (COPE) では、二重投稿、その他倫理についての情報を得ることができます。二重投稿のフローチャートはとても分かりやすく使いやすいものです。そして Council of Science Editors (CSE) では、主にアメリカとイギリスのジャーナルの動向が分かります。年に 1 度アメリカで総会があり、2～3 カ月すると各セミナーの資料がオンラインで公開されますので、これを見ると動向の推測が可能です。そのほかに Web of Science でインパクトファクターや引用状況の分析もします。JE で何か変更をするときには、他誌のインストラクションも必ず確認するようにしています。

セミナーに出ることも、情報収集としてはとても重要だと思っています。SPARC をはじめ、JST のセミナー、図書館総合展などはできるだけ出るようにしていますし、CSE には引き継いだ最初の年に編集委員長と私で出席しました。また、日本医学会が行う日本医学雑誌編集者会議 (JAMJE) は ICMJE の日本版で、医学ジャーナルの編集委員長を対象としたシンポジウムが 1 年に 1 度ありますので、これにも編集委員長が私が出席するようにしています。

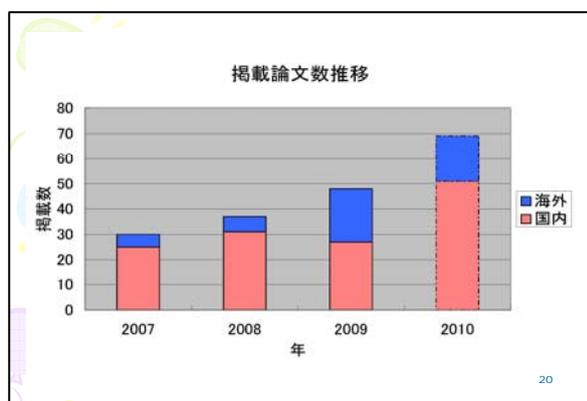
そして、集めた情報を編集委員会で共有するようにしています。現在は Supplement の出版のポリシーを、世界のほかのジャーナルの状況を調べながら検討しているところです。

結果

この 2 年半で投稿数が増加し、特に海外からの投稿数が非常に多くなりました。ただ、無料で投稿できるので、インストラクションを読まず、ジャーナルの名



(図3) 投稿数推移



(図4) 掲載論文数推移

前さえ間違っているようなひどい論文も投稿されてきます。それでは編集委員の負担も大きくなりますし、オンライン投稿システムの料金も増えますので、4月から掲載料を徴収するようにしたところ、少なくともインストラクションは読んでいる論文が投稿されるようになりました。投稿数が増えると質の悪い論文も増えましたが、それなりにいい論文も増えているようです。投稿数の推移を見ると、2007年に100論文だったのが2009年は200論文を超え、海外からのものが相当増えました(図3)。掲載論文数も、2007年は30論文だったのが今年70論文近くになっていますので、やはりかなり増えていますし、海外からの投稿論文の掲載数も結構増えています(図4)。今年、国内の論文掲載数が増えているのは、依頼したレビューアーティクルが含まれているからです。

実践までの険しい道のり

以上のように、2年半で一応結果が出ていますが、すんなりとここまで来たわけではありません。特に引き継ぎを始めたときには、One Person Publisherですからすべて自分でしないとイケないのですが、私はプロダクションについての経験は全くありませんでしたので、何を誰に聞けばよいか全く分からず、SPARCの存在も知りませんでした。とにかくわずかな手掛かりで人にものを聞きまくり、メールで問い合わせをしまくりました。そうしているうちにネットワークが広がって、何とか解決の糸口を見つけて進んでくることができました。

とは言っても、いろいろな失敗がありました。英文校閲も、最初は営業文句と安い料金に乗せられてインドルの校閲会社を利用したのですが、安かろう悪かろうで、校閲の意味がないような論文になってしまいました。これではいけないということで、1人のネイティブ専任校閲者に変更したら、スタイルや文言の統一は可能になりましたが、費用は倍以上になりました。

印刷会社も、やはり営業文句に乗せられて英文ジャーナルの印刷実績のない会社を使ってしまったため、スタイルが存在しないジャーナルを出版してしまいました。印刷会社を教育するといっても、お金を出してなぜそんな時間をかけなければいけないのかと思いますし、全く経験のない人たちに分かっていたくのは大変なので、eXtypesの導入を機に、思い切って印刷会社を変えました。現在は満足いくジャーナルになっています。

今後の課題

アクセプトから出版までのフローがかなり複雑で、早期公開までも時間がかかりますので、これはもっと簡略化しなければいけないと思います。それから、収支構造の改善もしなければなりません。冊子の印刷は縮小の方向です。掲載料も徴収するようにはなりませんが、これで終わりではないので、常に考えていかなければなりません。

世界の標準に追いつくべく、いろいろと努力はしま

したが、世界の標準はどんどん逃げていくので、これもいろいろと考えなくてはいけないと思っています。